

「対話と実行」座談会 グループ・団体との座談会 第5回 「かきせ川地域づくり協議会」(H21.10.27)の概要

(1) 開会(県司会)

県司会： ただ今からかきせ川地域づくり協議会の皆様と知事との「対話と実行」座談会を開催させていただきます。

この座談会は知事が各地にお伺いし、地域の皆様と直接対話をさせていただくことで、地域の実情、あるいは課題を把握し、これからの県政に生かしていこうと、昨年度から実施しているものです。それでは、知事から中山間対策、産業振興計画など、現在の県政運営に関するお話をさせていただきます。

(2) 知事あいさつ

黒潮町の皆様、かきせ川地域の皆様方、こんにちは。こんな大きな横断幕を作ってくださいありがとうございました。

今日は「対話と実行」座談会ということで、かきせ川地域づくり協議会の皆様、この座談会に応募していただき、本当にありがとうございました。

高知県は全体の92%が中山間地域です。そして限界集落もどんどん増えてきています。こういう地域をいかに元気にしていくのか、いかにその地域で住み続けられるようにしていくのか、これは県政の大きな課題です。また、高知県みたいなところが真っ先に人口減少と高齢化で厳しい状況に陥っていますが、いずれは日本全体もそういう状況になっていくことが予想されています。中山間地域の生活をどうやって守っていくか、中山間地域で暮らせる産業づくりをどうやっていくか、このことをずっと考えてきました。特効薬はなかなかない。これを一つやれば、全てうまくいくというものはないと思います。状況がものすごく厳しく、そもそも水道もない地域もあります。そういうところに簡易水道をつくることはできますが、その地域で若い方も含めて、多くの方が暮らしていける地域づくりをしていくということになりますと、大変難しい課題かと思えます。

かきせ川地域の皆様は、身の丈に合った計画づくりを進めておられて、地域の皆さんが楽しく過ごされることをまず目指していこう、またそういうところであれば、他



の地域からも人がやって来るのではないかというご発想で非常に活発な取り組みをされております。高齢化率も非常に高いと伺っていますが、非常に元気で、活発に活動を展開していらっしゃいますので、皆様からいろいろお知恵を賜りたいと思います。

先ほど見学させていただいた馬荷温泉で水を汲んでおられる方にもお会いしましたが、家に持って帰ってお風呂で入られるそうです。都会の人にしてみれば、本当の贅沢ということでしょうし、本当に素晴らしい資源だと思いました。そして七立栗（ななたてぐり）の圃場にも行かせていただきましたが、一本の木にたくさん栗がなまってまして、小さい実ですけど甘味があって非常においしい。この地域でしか採れないものだそうですから、本当に貴重な、ある意味プレミアのついたものとしてどんどん育てていくようになれば素晴らしいなと思ったところです。

今高知県では全力を挙げて高知県産業振興計画の取り組みを進めており、この中でも中山間地域の暮らしを守る、そして産業をつくることが一つの大きなテーマになっています。やろうとしていることは、高知県の経済の体力をもっとつけていこうということです。高知県は、残念ながら人口が平成2年から減り始めました。若い人が県外に出ていくだけでなく、生まれてくる赤ちゃんの数より亡くなる方がはるかに多いという状況が続いて、人口がどんどん減っています。また、高齢化が進んでいるということもあります。

結果としてお金を使う人の数が少なくなり、県内の市場はだんだん小さくなってきました。平成9年のピークには、大体年間で2兆円ぐらい売っていたのが、現在は1兆6,000億円で、ピークに比べて、2割ぐらい減っている状況にあります。県内市場は小さくなっているわけですから、高知県の元気を保つために必要なことは外からお金を稼いでくる力をつけ、県外からお客さんをお呼びできて、地元でお金を使ってもらえる力をつけることだと思っています。地産地消とともに、高知県にある良いものを県外で売る地産外商の力をつけなければならない。そのためには、まず生産地をもっと強くしていかなければなりません。より効率的にものが作れるようにしていくとか、七立栗のような、他の県に持っていっても売れるような、競争力のあるプレミアのついた、素晴らしい品物をどんどん作れる産地づくりをしなければなりません。

そしてもう一つは、ものが溢れている都会で高知県のものを手に取ってもらえるように、商品の磨き上げも必要になってきます。

そのためには技術開発の支援とともに、試し売りをするような場をたくさん設けて、そういう場に地域の元気な皆様からものを出していただいて、チャレンジしていただきたいと思っています。その上で更に大阪とか東京などの大きいところで、新しい市場を開いていくための取り組みを今後更に進めていくこととしています。

高知県地産外商公社を今年の8月に立ち上げ、東京のスーパー、居酒屋、レストラン

ンなどにどんどん販路を開拓していきます。地域の皆様と一緒に商談に行って、契約を取りつけてくる。そういう作業をスピードアップしてやろうとしています。

来年は大河ドラマ「龍馬伝」が放送されるので、高知県も「土佐・龍馬であい博」の準備を進めているところです。また、去年に比べて、今年は高知県とタイアップをして、いろいろ商売をやらせてもらいたいと言ってくれる県外のホテルなどが増えてきました。

高知県には素晴らしい追い風が吹いてるところです。この追い風に帆をいっぱい張って十分生かされるように、我々ももっと努力をしないといけないと思っています。少しずつチャンスが出てきてます。地域と都会を結んでいくルートを切り開いていきますので、ぜひともこれを皆さんで活用していただきたいと考えています。

生産地を強くするための支援策、更に商品を作っていくための支援策、試し売りの場を設ける、アドバイザーを派遣する、都会で販路を開拓していくための地産外商公社などの取り組み、販路開拓まで総合的にやっていこうとするのがこの産業振興計画です。

地域アクションプランというものも設け、県内で 221 の地域アクションプランを実施していくこととしています。

アクションプランは単に一時的なイベントやにぎわいづくりに止まるものではありません。補助金の審査も厳しく、しっかりと事業性を審査して、これでいけるとなったものには補助金をどんと投入して、実際にビジネスを動かし始める。こういうことで地域を元気にしていきたいと思っています。

中山間地域を元気にするための取り組みを、ここから学ばせていただき、我々の取り組みを、富士山のように裾野の広い、いろいろな問題に対応できるものにしていくべく努力していきたいと思っています。

(3) 自己紹介

司会（Aさん）： ここからは地域の区長である、私が司会をさせていただきます。かきせ川を中心とした御坊畑（おんぼうばた）地区、大方橋川地区そして馬荷地区の3部落では、かねてより地域の活性化を目指していこうという取り組みを行っています。

メンバーの自己紹介がありました。

司会： かきせ川流域の概要を、説明させていただきます。

このかきせ川地域におきましては、3部落とも少子高齢化になっており、特

に大方橘川地域は高齢化率が65%を超えている状況です。また、65歳以上の高齢者の合計は153名、うち一人暮らしの世帯が57名という状態です。そういう中、自分たちは、何とか地域、流域を盛り上げていこうと日々努力している状況です。

(4) 代表者からの発表

① おはなし玉手箱

Bさん： 私たち「おはなし玉手箱」は図書館が建設されたのを機に、地域に残されている言い伝えやお話、口伝で地域のおばあちやまからお孫さんに伝わっていた地域の文化が、消えていくのではないかという危機感を持ちながら、何とかして次世代にこのお話を受け継いでいきたいと思い、地域のお話を紙芝居にしております。かきせ川の「七立栗と山焼き」で9冊目になります。一番最初には尊良新王（たかながしんのう）にまつわる「小袖貝」の物語を作りました。

今日は皆様の地域に伝わっております、七立栗と弘法大師にまつわるお話を紙芝居にいたしましたのでご披露させていただきます。

(紙芝居実演)



司会： どうもありがとうございました。地区外から嫁いでこられた方、若い方、かきせ川流域に長く住んでいる私を含めた皆さん、この馬荷温泉並びに七立栗のことや、昔から行われていました山焼きのことを、この「おはなし玉手箱」の紙芝居で、こういうことが私たちの流域の宝だなということを再認識させていただきました。

それでは、次に協議会の会長から活動に至るきっかけを発表してもらいます。

② かきせ川地域づくり協議会

Cさん： 協議会の生い立ちについて説明させていただきます。ある役場の職員から、

助成金を利用して地域の活性化につながる事業をしてみませんかと話されました。それまでも馬荷地域の活性化のための活動はしていましたが、地区の人たちにはあまり知られてないような現状でした。これからは馬荷地区だけでなく、かきせ川流域での取り組みとして馬荷・橘川・御坊畑の3地区での事業はできないかと思いました。幸いなことに馬荷地区には冷泉があったので、これを利用した取り組みができればということで立ち上げたのがかきせ川地域づくり協議会です。

3地区合同では初めての取り組みで、何をどう進めていけばよいのかと、戸惑いもありました。最初からあまり大きなことをするのではなく、地域の人に関心を持ってもらうため、コスモスの種を3地区で蒔くことにしました。どこに蒔くか、地域の理解が得られるか心配でしたが、花もきれいに咲き、田ノ口地区からのウォーキングのお客様も来ていただき、地域の人が準備した品物も全部売れ、大変嬉しく思いました。

平成16年からは一歩進んだ取り組みを始めることにしました。どうすれば地域の人と一緒に楽しむことができるか、また継承していけるかということが大変気にかかりました。私の考えでは、地域づくりは皆で参加をしてつくるもの、協議会が決めてしまったやり方では地域の活性化にはつながらないと思いました。してみたいことを皆さんと一緒にしましょう。そして、参加してくださいという呼びかけをしたところ、多くの方が参加してくれました。

次の年には、「自分はもう年だから参加はできないが、庭の柿の木に柿がよくなっているので、取りに来て、それを売って見たらどうか」という温かいお言葉もいただき、遠慮なくいただいて出品したところ、売れました。このことで、この品物でないと売れないとかいうのではなくして、田舎でとれた野菜、柿、何でも売れるんだと。そういう思いから、少しずつその地域が一つになりつつあるなど。地域おこし、地域づくりというのは1人だけでは限界があると思います。

課題はたくさんありますが、私一人が悩んでできることではないと思っています。皆さんから来年はこうしようという話をいただければ、その方向でやるのが一番いい。ただ、基本とした地域の活性化についての方向性は大事にしなければならぬと思っています。

温泉施設をつくることは、今まで2度プランを作りましたが、結果としてはボツになりました。費用がかかりすぎることで、そして、これから先利益を生んでいくことが非常に困難な時代であり、採算が取れないこと。これは私たちも当然のことだと思っています。どうすればいいのかがこれからの課題

になるのですが、一つは自分たちの身の丈に合ったものにする。もう一つは、一番大変な冷泉の売上を増やすことです。当面は宅配をしながら利益を上げていく方法で進めていきます。宅配してくれる人を募集していきたいですが、地域のことなので、できれば区内の人に宅配してもらいたいという思いがあります。

知事： かきせ川地域づくり協議会で、最初に資料を見せていただいたときに驚いたのは、ちゃんと部会という形になっていて、組織がカチツとしてますよね。地域おこしというのは1人の力だけでは限界なんだと、みんなで力を合わせていかないといけないんだというお話、そのとおりだと思いますが、言うは易く行うは難しだと思います。このかきせ川の地域の皆さんの特徴は、やりたいことははっきりしていて、それぞれについて部会がきちっとできているところがすごいと思いますが、こういうきちとした形の組織をつくっていくにあたってどういう工夫があったんですか。

Cさん： 大体何かの団体と言え、会長が全てを取り仕切ってやるのが往々にしてあるわけですが、僕の場合、まず自分たちのやりたいことをこの地域で作り上げていく。幸いなことに七立栗や冷泉、食にしてもそういう組織ができて始めていたので、皆さんでやっていこうというのが一つと、そのことによって苦しいということでは駄目だと、やっぱり皆で楽しく活動したいという部分があります。それぞれの方向性をしっかり持っておりますので、安心して任せていけるというものがあります。私はそういう、細かく分けた上での組織づくりが必要だと思っています。

知事： やっぱり一つの目標を持ってやっていくことが重要だと思います。非常に参考になる地域おこしの活動だと思います。この馬荷温泉ですが、いろんな可能性がありそうだと感じます。まずは宅配サービスをしていくというお話ですが、その次の展開は何か考えておられるんですか。

Cさん： 温泉地の施設をつくる土地は以前に町の方で買い上げてもらっていますが、残念なことにそこを平地にする費用、予算というのはなかなかつきにくい。身の丈に合った取り組みということでまずは小さい掘っ建て小屋を建てて、宅配で少しずつお金を貯めてみてはどうかということで、できる限りのことはやっています。ハード面は難しい、ただソフト面で何とかカバーして、お

金が少しでも残っていけば、それも可能かなと。長い時間がかかるとは思います、できることからやっっていこうというのが基本的な考えです。

③ 七立栗保存会

Dさん： 七立栗とはどんな栗かというと、高さが1m50cm~2m ぐらいで、枝のもとの方から実が20個~30個ぐらい実るような栗です。こういう性質を植物学上、矮性と言いまして、一般的な大きさよりも小型な性質ということです。



名前ですが、年に7回ほど取れるのではないかということで七立栗、地域では大師栗とも呼ばれています。

七立栗と地域の関わりですが、部落の共有林に七立栗が自生していました。昭和5、6年頃の資料によると、七立栗に関する馬荷独自の取り決めで、他の地域からの共有林への立ち入りを禁止するという決議がされていたようです。それから七立栗は大変実の甘い栗でして、地元の人が売って、生活の足しにしていたようです。

山焼きについては、かきせ川を西と東に分けて毎年部落総出で日にちを決め、1,300町歩のうち1,000町歩の共有林を山焼きしていたそうです。山焼きをすると田畑の荒廃を防ぎ、害獣などから田畑を守り、病虫害の発生が抑えられます。また、七立栗も年に1回焼くことによりたくさんの実をつけます。

七立栗を活用した取り組みとして、平成6年、有志7名で七立栗保存会を設立しています。活動の内容ですが、保存会会長Eさんの指導のもと共同の農園で試験栽培をしたり、2カ月に1回程度の協議会、年に数回の剪定や接木、栽培方法についての勉強会、それから栗の実を利用した食材の試作で甘露煮、栗ようかん、渋皮煮をつくりました。大変おいしかったです。

平成20年よりEさんが切り枝の試験販売を行っています。切り枝とは、枝をもとから切り、特殊な液を使い、水揚げを良くしたもので、現在は県外の市場に出しているようです。切り枝は青いうちに出荷するので、猪などの害獣の被害がありません。また、矮性という大きくなならない性質であることから、何か植えたところの横に栽培しても迷惑にならないと言われています。切り枝は食用でないため、水分の多い休耕田でも栽培が可能だと聞いています。

七立栗を活用した今後の取り組みということで今、商標登録を申請中です。

あと栗の加工品の研究、販売、栗の産地の視察、市場で売れたものがどのようなところまでいっているかが気になるので切り枝の市場調査をしたい。鉢植え、盆栽の販売について保存会で研究をしたいと思います。若い人が少なくなり、田圃が荒れた状態になっているので、栗を植えて、山の荒廃を防ぐことも今後の取り組みにしたいと思います。

最後に今後の活動における問題点ということで、地元での切り枝生産の普及。現在はEさんが切り枝の運搬をしていますが、距離が遠いので、圃場の中に集荷場のようなものができないか。それからもっと若い人に参加してもらいたいというのが会長の願いです。休耕田での栽培も今後は課題になると考えています。

知事： この七立栗というのは本当に良い栗ですね。甘い、早い、それから1枝でたくさん採れる。食べるだけでなく、切り枝という形で観賞用にもなる可能性もあり、用途も多様ですね、しかも土地を選ばず、休耕田対策にもなる。これはすごいと思いましたが、これから展開していこうとしたとき、量が足りないことが今後ネックになってくると思います。とは言いながらこの栗はすぐできて、増やそうと思ったらどんどん増えていくので、私はすごくすばらしいと思っています。我々も地域産業振興監をはじめ、みんなでやらせていただきたいと思っています。

中山間地域で暮らせるようにするために、手間がかからず、収益の上がるような作物をできるだけ増やしていきたいと思っています。一つの地域でいろんな作物を植えて、年に何回か収穫ができて現金収入が入ってくるような「こうち型集落営農」という仕組みをつくっていきたい。お米を作って、隣で薬草も作ってそれを現金化する。更に小さい鶏を飼うことで、その鶏を売ってお金にする。果樹もやっている、自伐林家ということで時には間伐をやって、その木でも儲けようとか、いろんな仕事のかたまりで収入を上げていけるようになれば良いのではないかと考えており、その有望な作物を一生懸命探しています。

今、希望をかけているのが薬草です。牧野植物園も一生懸命開発をしていて、株を分けていますが、1つの作物だけと言っても全県内でできるかどうか分かりません。適地適作でないといけないと思いますから、そういう意味でこの七立栗も非常に有望かと思いましたが、まずは発祥の地でブランド化していただいて、みんなを引っ張っていただきたいと思っています。

④ ヒメノボタン

Fさん： この花は御坊畑地区だけの花ではなく、馬荷地区、橘川地区にもある花で、絶滅危惧種とされています。私は、かきせ川地域の取り組みの中で、歩きながら花を見て、健康づくりにもつながるというところに目を向けて、御坊畑の道端に花を植える取り組みを少しずつしました。地域の方々が「この花も植えたら」ということで花を持ってきてくれたりして、今はすごい元気に育っています。花いっぱいにして、年間を通して歩きながら健康を取り戻し、来てくれた人に楽しんでもらい、御坊畑に人が集まってくれるというところに着目して活動を始めています。その中でこのヒメノボタンを選びました。

かきせ川の活性化につなげていくために三原村のヒメノボタンのような里ができ、花で人が集まれる場所になって地域の活性化が図れたら、それは素晴らしいことじゃないかと思います。ヒメノボタンは、南面の日当たりの良い場所以外では自然の状態では生育しないと言われています。草に覆われてしまうと、数年後にはなくなってしまうそうです。黒潮町から幡多近辺にかけては8月から10月頃に花が咲きます。多年草ではありますが5、6年経つと、株は命が終わると言われています。種が落ちてそこから次の花が出てくるという花だそうです。

Gさん： 私たち御坊畑部落も今年から栽培を始めましたので、道端に植えたらみんなが見てくれるんじゃないかと思うんですが、話を聞きますと、道端に植えている花を盗まれるということもあるそうです。これからは小高いところにあるいい土地を借りて、少し広めに増やしていけたらいいなという願いを持っています。

知事： 絶滅危惧種で稀少種だということも、プレミアですね。ただ育てにくいんですね。だけど、その分プレミアがつくことがありますから、ぜひ花いっぱいになって、外でも売れるようになればいいですね。

⑤ 食部会

Hさん： 地域の食文化を活かした活性化ということで5つの項目に分けて会を進めてまいりました。

1つ目の郷土料理の継承ですが、馬荷の美味しいものとして「鶏飯」、「タッポ寿司」、これは竹の子寿司のことです。それから豆



腐、こんにゃく、おからを使った「六弥太（ろくやた）」、お茶、醤油、味噌などです。

2つ目の地域の食材を活かした取り組みとしては、七立栗を活用した加工品の試作をしました。「渋皮煮」、「栗ようかん」、「甘露煮」、いずれもすごく味が良かったんですが、見た目がイマイチということでした。

3つ目の郷土料理の体験学習の実験的受け入れ。これは今年の2月に、作る・楽しむ・味わうをテーマとして郷土料理の体験学習を実施しました。参加者は他地域から54名、地元の講師7名でこんにゃくチーム、豆腐チーム、寿司チームの3チームに分かれて体験学習をしました。そのときに作ったメニューですが、自家製栽培大豆とにがりを使った豆腐、自家製栽培芋と木灰を使ったこんにゃく、菜っ葉寿司、こけら寿司、タッポ寿司、おから料理、鶏飯、自家製味噌を使ったみそ汁などを作り、大盛況のうちに終わりました。

4つ目の温泉施設を活用した将来構想としては、地域には良質な冷泉が湧き出ており、地域づくりの中で温泉施設はいつでも核になって出てきます。身の丈に合った温泉施設が建設されるなら、近くに工房をつくってもらい、若い世代と一緒に郷土料理を作り、継承していきたいと思っています。もし工房ができればそこで作った郷土料理を町の良心市や直売所に出品して販売したいと思っています。

5つ目の今後の課題としては、若い世代は仕事を持っている人が多いため、一緒に料理をつくるのがなかなかできません。また、みんなで利用できる調理場が欲しいということ、料理ごとのレシピの作成も課題となっています。

知事： 体験学習の実験的受け入れで54名というのはすごいですね。そして若い人が入ってきてくれるようになり、家に帰って作りたいということになったら、こっちの食材をスーパーで手に取って買おうという話になりますね。実験的受け入れというお話ですが、これを今後も続けていこうというお考えはあるんですか。

Hさん： 続けていきたいと思っています。

知事： 調理場などもできてくればいいですね。温泉施設とうまくタイアップできるといいかもしれませんね。アクションプランの関係でうまくコラボレーションできればいいなと思います。

⑥ 橘川中山間生産組合

I さん： 大方橘川地区は、平均年齢が 70 歳近くになり、現在は多分 19 戸はないんじゃないかと思います。全体の人口は 20 人少し超えるぐらいです。橘川で私たち中山間生産組合は、10 年前に国の事業を取り入れ、高齢になると田畑へ行く道の草を刈ることや修繕することがままならなくなるということで簡易路線を舗装しました。その後はコスモス祭や地域にあるものを加工したりしましたが、何様にも小さな部落ですので、例えば、チラシを作ってもらって、入れてみても人がたくさん来て地域がそれを受け入れるだけの力がなかったと思います。本当の手作りで 5 年間活動してきました。私達が作って投げたりするおもち、これは実際においしいんですが、収穫も少ないです。でもこれはずっと続けてます。「稲木（いなぎ）」というもので自然乾燥した手作りのおもちを投げることによって、いつの間にか口コミとなり、多くの方がおいでくださり、5 年目を何とか迎えたようなことです。

また、(旧馬荷小学校を活用して活動している) 若者自立塾の塾長さんから何かできることはないかとお話をいただきまして、自立塾の方に畑の傍を刈ってもらったりしておりました。この荒れた畑の地権者の方とお話ししましたら、「畑をどんなにしてももらってもいいです」というお話をいただいたので、これを開墾し、今は自立塾の方が使っています。この高齢化した部落を一步一步前へ進めて、この部落を消滅させたくないという気持ちで、馬荷と比べると狭い範囲ですが、荒れ果てた田圃を、町・県の助成を受けることで、開拓することができました。しかし、部落の中にはもともとそれを整備するだけの力がありません。それで募集してありましたら、やっとその目途が立ちました。有機のものを作りたい、そういう方がおいでまして、やっと肩の荷が下りたような形です。ただ、今は助成されるお金を活用してきたけれど、来年からどうなるかと思います。でも、1 年でも 2 年でも前を見て進めていきたいという気持ちでおります。

知事： 1 年でも 2 年でもというお気持ちですね、先々まで続いていけるようになるためにも、ぜひ若い人に入ってきてもらえればいいですね。それがなかなか簡単なことじゃない、それが一番難しいことなんだろうというふうに思います。

I さん： 若い人に帰って来てもらうのはまず無理なんでしょう。今は I ターンというような形で何か仕事を持ちながらやりたいという方に入っていただいています。昨年は 1 人有機栽培で入ってきてくれた方がいますので、何とかして

そういうことを続けて少しでも機会ができればいいと考えています。

知事： 出身地にかかわらず、農業をやりたい若い人は土地がなくて困っているというパターンが結構あります。農業大学の生徒さんと毎年お話をさせていただく機会があるんですが、「僕のうちは農家やないので土地がなくて農業ができません」という子が結構います。多分ここにミスマッチがあって、農業をやりたいと思っている若者は少なからずいる、だけど農業は土地がないとできないので、簡単にやり始めることができない。もう1つは、技術をつけることがものすごく難しい。だから、教えてくれて導いてくれる人が要るだろうと思っています。お互いのニーズが合うようなシステムができればいいなということで、今年からそういう取り組みを始めたところですが、まだ始まりの段階ですが、空いてる土地を貸してもいいと思っている方の情報を1か所に集約をし、さらに県外から移住したい、帰ってきたい、新たに就農したいと思っている人の情報を県庁で1つに集めて、いろいろな情報を紹介していく。地域に入ってからずっとフォローアップしていくような仕組み、まず情報を集めるため、県庁に移住コンシェルジュを雇い、その取り組みを始めたばかりです。その結果として、去年の新規就農者が高知県全体で大体110人ぐらいでした。今年から研修もセットにし、土地の紹介もする取り組みも始めた、さらに研修期間中の生活費を一定以上は保障しましょうということでやり始めたら、今年は恐らく150人は就農することになりそうです。全県内での取り組みですから、この地域にすぐ結びついてくる話ではないかもしれませんが、取り組みをしたことで去年より就農する人が1.5倍ぐらい増えたのもまた確かであると思います。中山間地域の集落を維持していくというのはなかなか難しいですが、他方、若い人が入ってくれないと維持できないこともまた事実だと思っていますので、若い人たちが就農できる仕組みづくりを私達ももっと努力をしていくべきだと思います。またそういう仕組みや募集の仕方をお伝えしますので、ささやかなことになるかもしれませんが、ぜひ使っていただければと思います。

司会： 黒潮町では平成19年から、社団法人高知県自治研究センターの庭先集荷実証実験が行われています。中山間地域の集落維持につながる取り組みの1つである、庭先集荷の実験が一番にこのかきせ川地域から始まりました。

⑦ 庭先集荷

Jさん： 庭先集荷のビジネスサポーターとして、平成19年の10月より出荷サービ

スをさせていただいています。地域の人との関わり、直売所での関わり、そこで知り合いになったりすることがすごく気に入っています。

当初、「私は作ることが趣味なので売らない」と言っていた人たちも1回出すことによって出荷する喜びを分かっていたいただき、現在では集荷に行くたびに出荷している人がいます。現在、湊川と馬荷地区で40名余りの人が出荷をしています。

私たちは朝5時頃に起きて、最終の出荷場所に6時前には着くようにしています。旧大方町には3カ所の直売所があります。JAの直売所は朝7時に開店で、開店と同時に買い物に来るお客さん、それから持って行く人が同時に集まります。その時間帯に持っていった方が売れるので、その時間帯を目安に品物を預かっています。各集荷場所は納屋の軒先であったり、集会所であったり、それから出荷BOXを自治研の方が準備してくれているので、その中に品物を入れていただき、受取伝票と引き替えに品物を預かるようにしています。いつも出荷される人がいない時には安否の確認をしたり、会った人に「誰々さんは最近出してないがやけんど元気におるかね」ということも聞いたりしています。集荷場所は地域の人達の情報交換の場所にもなっています。

人間はいつまでも元気でいたいと思うものですが、特に高齢となるとその事が気になります。作物を作る、売る、小銭を稼ぐという生きがいがづくりで心身ともに健康でいられると思います。また、集荷をする日を間違えると出しても取りに来ないということがありますので、日にちの確認をしたり、品物の値段を考えたり、次は何を植えようかと頭を使うようにもなっていると思います。

これからはたくさん野菜が出来る時期になるので、まだ出してない人は1点でもいいので出すようにしてほしいです。

Kさん： 私は出荷をしている者ですが、Jさんが私の所まで来てくれて、品物を出しています。週に2回楽しみにして、売れるだけ売ってもらおうと思っています。

Lさん： 私も同じです。若い時は主人が持って行ってくれましたが、80を過ぎて、どうしようかと思った時に、この話をいただき、それからは毎回楽しみに待っています。おかげで知らない間にお小遣いが増えていく感じで、楽しみながら健康に繋がっていくのではないかと思います。「今は何ができよう、何が

出よう（出ているのか）」とか、「いくらぐらいで売れようろうか」みたいな情報ももらってます。

知事： この黒潮町でやっておられる庭先集荷の話、本当に素晴らしいと思います。Jさんもテレビに何度か出られて（いるのを拝見して）、かなり献身的な形でやっておられると伺って、本当に素晴らしいと思います。実はこの庭先集荷の取り組みを、地域によってスタイルが変わるかもしれませんが、私は、県内に広げたいと思っています。黒潮町の職員に来ていただいて、県庁で勉強会をやらせていただいたぐらいなんです。作っている所と売り場を結ぶものが、高齢者の皆様が増えてきたら必要になります。例えば役場のいろんなサービスをくっつけることはできないだろうか、それからちょっとしたお世話。「これ持ってっっちゃってくれんかね」とか、そういうのを全部一緒にした形のものを県内で作ることはできないかと。残念ながら採算面について難しいところがあり、どんどん県内で広がっていくという状況ではないと思いますが、他方、実験的に何か所かでやることにしています。今、手を挙げていただいているところですが、残念ながらそんなにたくさんありません。

かなり献身的な働きがないとできないということを、多くの皆さんが分かっているんでしょう。だけど、もたらしている成果は素晴らしいと思います。ぜひこの黒潮町でJさんのやっている活動がいかに素晴らしいかということをご皆さんに広めてください。私達もそうしたいと思っています。それで「俺らもやろう」という人が出てくることを期待しています。中山間地域の暮らしを守るだけでなく、福祉の面においても、ものすごい大切なことだと思っています。

Jさん： 福祉とは今まで与えられてきたものだけど、「産業福祉」ということで、自分が働いてお金を得る。与えられるだけでなく、自分から与える、そういう福祉をこれからは構築していくべきじゃないかと聞いて、確かにそうではないかと思っています。

知事： （県の高知型福祉の取組として）あったかふれあいセンターを作っています。小規模多機能施設といいまして、1カ所でいろんな介護や、子育て支援や障害者の方のケアができるような施設。高知の中山間は、サービスを細切れにしたら利用者が少なくてうまくいきません。民間からも入ってこれないということになります。なので、1カ所で複数のサービスが全部できるようにしたらどうか。そうしたら人が集まり、うまくいくだろうと。これを今、県内30カ所で作

ろうとしています。新しい高知型福祉の拠点です。こういう所とさっきの集荷、実際に出荷される方の所、市場をクルクルと繋いでいくようなシステムができるといいんじゃないかと思っています。こういうことは公的なことも含めて、県民の皆さんのお金を使うべき分野じゃないかと思っています。しかし、もう少し実験をして、どうやればうまくいくかということを勉強していく必要があると思っています。

⑧ 青壮年部

Mさん： 青壮年部の年間の活動報告となりますが、青壮年部の部員は現在 33 人で構成しています。年間行事としまして 6 月と 10 月の県道部分の草刈り、そして 8 月の盆踊りの進行。7 月には地域の方に生の歌声を聞いてほしいということで女性アーティストのコンサートを開きました。このコンサートは 110 名くらいの参加がありました。そして年間に部落で行われます愛校作業、コスモス祭り、地域運動会への参画・協力という形で 1 年間の運営をしています。

知事： 生活を作るために、ずっと暮らしていけるような産業を作っていく。そういう仕組みを作っていくことも重要ですが、時々こうやってイベントを打っていくと、弾みがつくので大切なことですね。大月町のコスモス祭りに行かせていただいて、聞いたところ、大月町のコスモス祭りでは 6,500 人の村で 3 万人も来るそうです。3 万人来て、地元の道の駅の売上がその期間、通常に比べて大幅に伸びたそうです。近隣のホテルは必ず満杯になり、ものすごい経済効果をもたらしているという話なんです。そういう形でイベントを打つと周りにいろいろな効果も出てきます。またそれに向けて準備するのが楽しいと思います。さっきのコンサートも地域で 110 名とは、すごいことだと思います。

Cさん： 今後、地区の人口は減少していき、高齢化していきます。これを当たり前のように指をくわえて見ているわけにはいかないというのが、この地域の思いです。これからは、近い将来よりも、50 年先を考えていく必要があるのではないかと思います。今 1 歳、2 歳の子供がいます。この子達が 50 歳になった時、「良かったね」と言って喜ぶものを残していきたいし、自分たちにはその責任があると思います。この地区がいつまでも元気に残っていくためには、人は一人では生きてはいけないんだよ、苦しいこともあるけど、楽しいこともあることを身をもって示すことが一番大事だと思います。かきせ川地域づくり協議会が、地域の活性化のためにできることはたくさんあると思います。

決して一人ではありません。この地区をいつまでも残していくために、(地域の)皆さん、力を貸してください。

(4) 意見交換

司会： ここからは、自由な意見交換の場とさせていただきます。

Nさん： 私は馬荷地区で暮らす年寄りです。自分の思うことが伝わるように話せるかどうか自信はないのですが、知事さんにぜひ相談したいことがあります。「お前はこう言いたいやろう」ということを、Aさんにぜひ助けていただきたいと思います。

司会： Nさんの言いたい内容はこの様なことだと思います。この馬荷地区の学校、田ノ口小学校に約3年前に統合になりました。その後、休校中の馬荷小学校に若者自立塾を開設しております。御坊畑地区、大方橋川地区、馬荷地区は先ほど説明したように大変な高齢化地区です。そこで、馬荷小学校を利用して若者自立塾の塾生を預かると共に、託老所という形の施設運営はできないだろうかということ为先だってNさんからご相談いただきました。

知事： また詳しくお話を伺わせていただいて、どういうことができるか検討させていただきたいと思います。さっきちらっと申し上げましたが、今、県はあったかふれあいセンターというのを作ろうとしています。この間、沖ノ島に行ってきました。ここは子どもが3人しかいなかったの、保育園を作ることができなかった。しかし、あったかふれあいセンターだったら、預かることができ、教育もできるようになった。他の高齢者の皆さんも一緒です。高齢者の皆さんは小さい子と一緒に賑わいができますし、子どもたちにとっては高齢者の皆さんからいろんなことを教えてもらえます。ご飯の食べ方や昔話からはじまり、礼儀作法も段々と学ぶこともできるでしょう。障害者の皆さんのノーマライゼーション、そういうものにも非常にいいことだと思います。この馬荷小学校という大きい施設を使うか、それとも地域のいろんなデイケアセンターとかと併設してやっていくとか、いろんなやり方があるかと思いますが、いずれにしてもそういう高知型福祉というのを進めていこうと考えています。

Oさん： 旧大方町の道路はものすごい遅れてる、道路の話が出てこなかったの、道路の事をよろしくお願いします。

知事： 私は47都道府県知事の中で最もインフラ整備に熱心な知事だと思っています。高知県の場合は、都会だったら当たり前のようにできている所のインフラができていません。極端に遅れている。いろんな指標を取りましても46位、47位だったりしている。今回補正予算で、インフラ整備をスピードアップしてできるようになりました。財政が厳しく、ピークの3割ぐらいまで公共事業が減っていました。それを去年と比べて20～30%増しぐらいのスピードで仕事をしています。少しずつではありますが、インフラの整備をしていかないといけない。これは場合によっては国ともいろいろ協議をしていかないといけないと思っています。私は高知県において公共事業＝悪という考えは絶対おかしいと思っています。コンクリートから人へと言いますが、人の命を守るコンクリートもあるじゃないですか。コンクリートから人へ、私も大賛成です。では、その分全体の予算を削るんだったら、コンクリートは人の命を守る所に集中すべきだと私は思っています。

Pさん： この過疎地域においては、中山間地域等直接支払制度というのを取り入れているわけですが、知事にはこれを将来に渡って継続して伸ばしていただきたいと思っています。この過疎地域にとっては大変役に立つ事業だと思いますので、できる限り継続をお願いします。

知事： 当然であります。地域で雇用と所得を生み出していきたいという、地域アクションプランになっている部分は大きく事業として、将来育てていきたい。合わせて中山間の少し小粒なものでもしっかり支えていくことで、所得・雇用を生み出す、そういうものを続けていきたいと思っています。試行錯誤の繰り返しかと思いますが、絶対これは続けていかなければいけないことだと思っています。

司会： それではこれで座談会を終了させていただきます。

知事： ありがとうございました。